

子どもたちによる宝の受継ぎ

暮らしの技、伝統野菜、郷土食……。地域のなかには、そこに暮らす人びとによって培われてきた数々の宝があります。地域の人たちから子どもたちへ、子どもたちからその下の子どもたちへ。地域の宝の引継ぎを教育ファームで！

地域の食生活を支えてきた伝統野菜

岩手県岩泉町の伝統野菜、安家地大根は鮮やかな紅色が特徴。ビタミンCの含有量が多く、冬に青物が不足する北国では貴重な野菜でした。また、肉質が固く水分が少ないため、貯蔵性にも優れています。安家地区教育ファーム推進協議会では、安家小学校の子どもたちが安家地大根の保存に取り組んでいます。

一昔前まで、岩泉でダイコンといえばこの地大根をさしました。辛みが強いので、ダイコンおろしなどにして「その絞り汁に囲炉裏で焼いたアツアツの田楽豆腐をつけて、ジュッと音立てるくらいのところを食べるとうんめえのよ」。おじいさんの昔話を聞きながら、子どもたちは地大根のタネとりに励みます。

春に、タネとり用に保存しておいた地大根を1本、学校の玄関脇に植えました。やがて芽が伸び、花を咲かせ、実サヤがぶっくりと育ったところで抜き取って、陰干し。しっかり乾かしたあと、サヤからタネを取り出すのです。



タネを取る。根元には栄養を使い果たしたダイコンが…

栽培にはちょっと手がかかるけど

8月。子どもたちは自分たちでとった地大根のタネを畑にまきました。「今は普通の白いダイコンも栽培されています。ダイコンは交配しやすいので、芽が

出してから安家地大根の特性が現れているものだけを残す、間引きが大切です」。農家の小野寺キヌエさんの説明を受け、子どもたちは丁寧に間引き作業を行います。

手間のかかる作業をやり遂げ、10月末、見事に大きくなった地大根を収穫！葉っぱをつかみ足を踏ん張ると、土の中からきれいな赤いダイコンが次々と姿を現します。「自分でとったタネからダイコンが育ち、こんなに豊作ですごくうれしい！」と5年生の女の子。収穫した地大根は、さっそく大根おろしで食べてみます。「辛い〜！」。けれども、水分の少なさを生かして、薄切りでチップスにしたり細切りでかき揚げにすると、「パリパリしておいしい」「うちでも料理してみたい」と大好評！



子どもたちとともにめぐるダイコンのいのち

来年のタネをとるためには、特に素質の良い地大根を選んで、保存しておかなければなりません。子どもたちは、掘り出した分から吟味に吟味を重ね、タネとり用の5本を選び抜き、貯蔵用のものと一緒に、土に穴を掘って「いけ」ます。「おやすみー」「生きててねー」。声をかけながら、土をかぶせていきます。

いけた地大根は来年の春に再び掘り起こされ、またみんなでタネをとり、栽培し、さらに次の年へ。安家地大根の遺伝子は、安家小学校の児童全員が力を合わせて、地域の人びとと一緒に大切に保存していきます。



「杉葉を敷いていけるとネズミが来ないんだ」。おじいさんの生活の知恵

6 教育ファームの成果を引き継ぐ

「つながる」をキーワードにした取組み、あれこれ

6年生から5年生へつながる「お米のいのち」

小学校5年生を対象に、各地で「お米の学校」を開催している新潟県十日町市、なぐも原・結いの里の指導農家、臼井隆さん。子どもたちが、1年間かけて、育て、収穫したもみは、すべてをもみすりして食べるのではなく、「少しでもお米のままとしておいて、次の年の子どもたちに渡してください。そうすれば、お米のいのちはつながります」と語りかけます。

そして新年度。お米の学校は、新5年生への種もみの贈呈式から始まります。「この種もみは、私たちが一生懸命育ててきた“〇〇学校米”です。今年は皆さんが育てて、お米の大切さを知ってほしいと思います」。新6年生の思いとともに、お米のいのちは新5年生に受け継がれていきます。



新6年生から種もみの贈呈

人と家畜と作物、伝統農業の循環を知る



新潟県上越市立高志小学校の5年生は、学校で2頭のブタを飼育しました。人間が育てた作物をエサに、ブタは育ちます。そのブタのフンを集めて堆肥をつくり、春に、新5年生の米づくりや新2年生の野菜づくりのために、田んぼや畑にすき込みます。人間と家畜と作物の小さな循環。伝統的な農業の一端を子どもたちは体験しています。

リーダーシップを引き継ぐ

京都市の静原コスモストピアの会で間伐体験をする静原小学校の子どもたち(カード4-8)。小規模校の静原小学校では、活動はいつも縦割り班で、最年長の子どもがリーダーです。大き

な木を倒すときは、「危ないところに1、2年生をおいたらあかんで」とリーダー同士が声をかけ合い、とにかくたくましい。現場で協力しながら仲間意識を育むことにより、子どもたちは本物の共同作業を身につけていきます。そして、頼れるリーダーの姿を見ながら、次のリーダーが育ちます。日本の共同体でかつては当たり前のように機能していた教育力が、ここでは今も発揮されています。



低学年をしっかりサポート！

学校を中心にして伝わる地域の技

広島県尾道市の木ノ庄西地区教育ファーム推進協議会では、木ノ庄西小学校の先生たちが積極的に働きかけて、地域の人びとから子どもたちに農・食・暮らしの技を伝授してもらっています。学年ごとの野菜づくりから、全校あげての米づくり。そして地域みんなで大々的にお餅つきをする収穫感謝祭。

稲刈りのあとは、残ったワラでお正月のしめ縄飾りに挑戦。子どもたちに米づくりを指導してきた地元農家の菅安義治さんが、縄のない方から教えます。

苦戦する子どもたちの間を回りながら、「こうやるのよ」と見事な手さばきでフォローするのは、担任の先生たち。「やったことなかったんだけど、毎年、菅安さんに教えてもらってるうちに上手になっちゃって」。

ホールの隅では、「仕事が休みだったので」と参加したお父さんが、やはり初めての縄ないに四苦八苦。

木ノ庄西小学校を中心に、地域の宝はお年寄りから子どもたちへ、そして先生や保護者まで、いく重にも受け継がれていきます。



ワラをクタクタにしながらかつお父さん

教育ファームミュージゼアムをつくろう

教育ファーム1年間の体験からは、記録や作品、発表資料、料理レシピなど、たくさんの成果が生まれます。これらは子どもたちと共同でつかった地域の農林漁業・食のすばらしさであり、将来の後継者の成長を物語る貴重な財産。地域に残し伝え、みんなにアピールし、食農教育の取組みを広げる拠点をつくっていきましょう。

空き教室「ミニ美術館」で教育ファーム展示・交流



空き教室が美術館に変身

懇談会や学習発表会など、学校にはたくさんのお客さんがやって来ます。せっかくの機会ですから、皆さんに教育ファームの作品群を見ていただきましょう！

広島県尾道市の木ノ庄西小学校(木ノ庄西地区教育ファーム推進協議会)では、空き教室を1室まるごと「ミニ美術館」にして、学校へ来るお客さんをご案内しています。展示されているのは、ブドウづくりやイモ掘りなど教育ファームを題材にした絵をメインに、図工の時間などで子どもたちがつくったたくさんの作品(カード4-4)。

いきいきとしてダイナミックな作品群は、見る人に「実体験にもとづくことで、子どもたちの表現力はぐっと豊かさを増す」ということを理屈ぬきで納得させる力を持っています。

お客さんには教育ファームの魅力を伝え、指導農家にとっては活動の励みに、そして子どもたちと先生の「見てもらえる」喜びにもつながる、小さいけれど意義深い、地域の貴重な美術館です。

次世代の郷土料理を生む!? 「オリジナルレシピ集」

日本一の柿生産高を誇る奈良県五條市で、柿の栽培から販売、食体験に取り組む西吉野中学校(西吉野柿部会 カード1-2)。3年生は体験の総まとめでオリジナルレシピを開発。出てくるメニューは、柿ピザ、柿のちらし寿司、柿のプリン、柿パイなど斬新そのもの。そのなかから、担任の先生と保護者が審査をして、優秀賞を決定します。

すべてのメニューは「オリジナルレシピ集」にまとめられ、卒業式で3年生にプレゼント。「今年の優秀賞は柿パイだったけど、私はちらし寿司がおいしかったな」。生徒それぞれのお気に入りの味は家庭で再現され、やがてこのなかから、次世代の郷土料理が生まれてくるに違いありません。



カラフル！斬新！柿のピザ

地域の文化祭で活動をPR！

長野県松本市のくれき野生産組合の教育ファームでは、芝沢小学校の5年生が米づくりを体験。その活動を、「地域の人びとにも知ってもらいたい!」と、子どもたちは壁新聞をつくり、地域の文化祭に展示しました。模造紙にタネまきから脱穀までの作業写真を貼り、解説と感想が書き込まれたわかりやすい展示は、文化祭にやって来たたくさんの人たちに、くれき野生産組合と芝沢小学校の取組みをおおいにPRしました。



6 教育ファームの成果を引き継ぐ

家庭に、学校に、指導生産者に、「教育ファーム財産」を残そう

大事なアルバム「教育ファーム活動記録集」



広島県の三次農業協同組合の教育ファームで古代米づくりに取り組んでいる酒河小学校の5年生は、活動のあとに必ず、振り返りを記録。「おにぎりの化石の写真を見ました。な、な、なんと、2000年前にもお米があったのです」。そこには、子どもたちの素直な感動が書き綴られています。

1年間書きためた振り返りは、最後にそれぞれ1冊にまとめ、子どもたちが家庭に持ち帰ります。子どもにとっては、自分たちが育てたイネと田んぼの記録ですが、保護者にとっては、子どもの貴重な成長の記録。家族の財産として大切に保存していきたいものです。

お母さんたちの反応をつかむ「アシスタントノート」

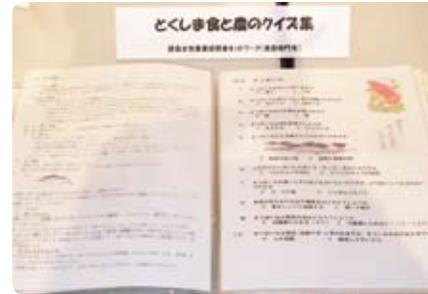
山口大学教育学部附属幼稚園(やまぐち里山環境プロジェクト)では、活動日には必ず、数人のお母さんたち(たまにお父さんも)が、先生のアシスタントとしてお手伝いに入ります。

そこで活躍するのが、「アシスタントノート」。その日の活動内容や感想をノートに書き込み、次の活動日にやって来る別のお母さんたちに引継ぎをして、子どもたちの体験を共有するのです。

一方、やまぐち里山環境プロジェクトのスタッフは、このノートのひとつのリサーチツールとして活用しています。今回の体験をお母さんたちがどう感じたか。どんなことに興味を示すのか。その情報をノートから読み取り、次の企画に反映させ、体験をさらに充実させていきます。



指導農家の「教える苦心」の成果「クイズ集」



「オタマジヤクシは田んぼで何の役に立つの?」。子どもに聞かれたとき、サツマイモ農家の植田美恵子さん(徳島女性農業経営者ネットワーク)は、とっさにはこたえられませんでした。農家にとっても、専門外の作物については、知らないこと、興味深いことがたくさんあります。徳島女性農業経営者ネットワークでは、農家が集まってアイデアを出し合い、そんなあ

れこれを集めてクイズ集をつくりました(カード5-2)。米、サツマイモ、ウシなど、それぞれの農家が伝えたい思いと、農家同士の情報交換の驚きがつまったクイズ集。「いろいろな農業体験の現場でぜひ活用してもらいたい」と植田さん。

女子大生が子どもへ読聞かせ 大きな大豆絵本

見開き約50cm四方。大迫力の絵本『だいちくんのへんしん』は、宮城学院女子大学の学生たち渾身の手づくり。仙台市のNPO法人オリザ・ネットで大豆栽培に取り組む同大学附属幼稚園の子どもたちに、それで読聞かせをします。

『だいちくんのへんしん』の大きさとカラフルな絵に、子どもたちは釘づけ。枝豆が大豆になり、それが豆腐や醤油、油など、さまざまな加工品になって、再び食卓で出あうストーリーに、みるみる引き込まれていきます。

枝豆の収穫のときには、「知ってるよ、これが大豆になって、お豆腐になるんだよねー」と子どもたち。巨大絵本は、バッチリ役割を果たしたようです。



子どもが育つ・生きものが育つ田園・里山空間として

山川や田畑、「食」を含めたさまざまな暮らしの文化、そのすべてが次世代に継承していくべき貴重な財産。教育ファームでこの財産を活用し伝えていきましょう。

里山には教育ファームの「ツール」が一杯

長野県辰野町の沢底部落。合鴨農法の藪田グリーンファームは、集落に残る田園・里山の空間や暮らしや文化を守り引き継いでいこうと、「落ち葉を拾って野菜を作ろう！ プロジェクト」を企画したり、畑にブタを放牧したり、里山ならではの「ツール」を目一杯生かして、教育ファームを展開しています。



沢底部落の里山風景

教育ファームで里山の休耕地と伝統野菜を復活

藪田グリーンファームの連携団体「沢底福寿草の里景観保全委員会」と信州豊南短大との間に地域協定が結ばれたのは2008（平成20）年の3月。以来地域と大



上野大根を収穫する大学生

学が手を携えて教育ファームに取り組むようになりました。学生たちを引率して沢底を訪れる学長代行の森本健一教授は、「こんなにすばらしいところで勉強させてもらえるのは、本当にありがたいですよ」と語ります。秋には、短大で生活園芸を学ぶ学生がこの地域に伝わる伝統野菜の上野大根を収穫。畑は休耕していた土地で、教育フ

ームはこうして畑の復活＝里山の復活にも一役買うことになります。肉厚の歯ごたえが沢庵漬けに最適の上野大根を、学生たちは地元の人たちに手伝ってもらいながら、洗って干して漬け方まで教わりました。

里山の食と暮らしを引き継ごう

冬になると、地元の辰野東小学校5年生の子どもたちが凍り餅づくりにやって来ます。信州の「寒」を利用した伝統食。ついた餅を切ってワラひもで結わえ、水に浸けたあとで軒下に干して凍らせます。こうすると、凍った状態から水分が昇華して消えて保存が効くようになり、昔は春の田植えからさまざまな野良仕事に持って出かける伝統的な郷土食でした。スーパーでの買い物当たり前になっていくにつれて徐々に姿を消してしまいましたが、「食」を復活させることはかつての里山の暮らしを復活させ引き継いでいくこと。地域のふれあいセンターに集まってきた子どもたちは、その「かつての暮らし」を体験してきたおばあちゃんたちから、生まれて初めての凍り餅づくりの手ほどきを受けます。こうして、お年寄り子どもみんなで伝統食をつくること自体が里山の暮らしの復活。「にぎやかでいいね」とおばあちゃんたちが嬉しそうに笑います。



おばあちゃんに餅の結え方を習う

「ずっと昔からつづいてきた里山の暮らしがここ数十年で急に壊れかかってしまっている。その数十年のほうが仮の姿。それをただ元に戻したいだけです」と、藪田グリーンファームの有賀茂人さんは語ります。

子どもたちの昼食には、豊南短大生が漬けた上野大根の沢庵漬けが出されました。里山の魅力に惹かれてやってきた若者たちから、その里山で暮らす子どもたちへ。教育ファームによる、新しい「里山継承」のあり方です。

6 教育ファームの成果を引き継ぐ

農の生活空間を守り引き継ぐさまざまな取り組み

町の人たちと里山を守る

山口県で教育ファームに取り組むやまぐち里山環境プロジェクトの活動の拠点となるのは、いわゆる「限界集落」と呼ばれる地域です。人が減ると農村や地域の自然が荒れていきます。それを止めるために、教育ファームで町の人たちとの往来をつくり出そうとしています。地域や環境、農業や自然、そのなかでの人びととの付き合い……教育ファームでお米づくりや野菜づくりに取り組む町の人たちは、これらがまだふんだんに残っている里山の魅力に惹かれ、繰り返し訪れるようになります。野山の散策や川遊び、炭焼き体験や基地づくりなど、訪れた子どもたちに「里山」を存分に感じてもらう「子ども環境学習教室」も実施しています。



完成した基地でお弁当

都会の人たちと里山を守る

NPO法人懐かしい未来の活動では、東京を中心とした都市住人たちが埼玉県小川町の圃場を訪れ、お米や野菜づくりをしながら、地域の生態系や景観の回復にも取り組んでいます(カード3-7)。秋には地元の「あったか祭り」を、田んぼの脇のスペースで地域の人たちと一緒に開催。



みんなで集まって「あったか祭り」

集まってきた地元の子もたちも一緒に、自然散策を行って周辺の生きものや植物を探したり、また小川町伝統の和紙づくりはこの地域の風土のおかげだということを学んだり、里山を守って引き継いでいくことをみんなで考えました。

島の自然・農業・食・文化を引き継ぎ、健康的な食習慣づくり



学校田で収穫した米で餅つき

鹿児島県徳之島の伊仙町食育推進協議会。減反で稲作からサトウキビへの転換が図られ島から田んぼが消えていくなかで、「主食のお米を子どもたちにつくらせたい」という声が上がリ、町内の3幼稚園、8小学校、3中学校が参加して教育ファームでの米づくりが始まりました。米づくりが途絶えつつあるために、虫追いや秋祭りなど伝統行事の意味や

意義を理解することがむずかしくなっています。米づくりの経験のある世代が元氣なうちに、田んぼがありイネが実る昔の風景を復活させ、お米について思いをはせる機会をみんなで共有し、地域の文化や風景を保ちつづけようとしています。

一方江戸時代からの基幹作物サトウキビ畑の横には徳之島和牛が飼われていて、その堆肥を畑に返し循環型の農業が行われています。町の喜念小学校では、校庭にある畑でとれたサトウキビを、ウシと一緒に子どもたちが挽いて搾り、毎年黒糖をつくっています。



徳之島の基幹作物 サトウキビ畑

長寿世界一の男女を輩出した町として有名な伊仙町ですが、実は平均寿命は全国の数より下回っていたことが統計からわかりました。いつの間にか浸透してしまった欧米型の食習慣を見直し、島の産物や食の知恵も生かした健康的な食生活づくりを目ざしています。そうした取り組みのなかで、かつてあった田んぼの風景、今あるサトウキビ畑の風景など、島で培われた生活空間と文化も引き継いでいこうという教育ファームの取り組みです。

発表会、食フェスタ、感謝祭でアピールを

教育ファームでやってきた成果を来年再来年と引き継ぎ、みんなで共有するために、子どもたち自身が発表、アピールする場をつくりましょう。

教育ファームの成果のお披露目

京都市静原の農家有志「静原コスモストピアの会」が休耕田で育てたコスモスの花が評判となり、2000(平成12)年から始まったコスモス祭り。地元の農産物や加工品、飲食物の直売ブースが並ぶなか、静原小学校の子どもたちにとってこの日は、コスモストピアの会と一緒に取り組んできた教育ファーム活動をお披露目できる晴れ舞台です。

祭りのオープニングは、3年生以上の子どもたちによる和太鼓。春からつづけてきた農業体験を振り返りながら、「祭り太鼓」「田の虫送り」「雨乞いの太鼓」の3曲を力強く叩きます。「わっしょい、わっしょい!!」、紙粘土でつくった野菜のオブジェをぶら下げ、静原川の生きものが描かれたかわいいお神輿が登場しました。担ぎ手は、元気いっぱいの1、2年生たち。和太鼓もお神輿も子どもたちが1年間つづけてきた教育ファームの成果、会場の熱い注目を集めます。



野菜のオブジェがぶら下がったお神輿

地域への思いを伝える子どもたち

この日はまた、学んできたことの発表の場にもなります。5年生は夏に行った静原川の水質調査の結果や、拾ったゴミの量を報告しながら、「ホタルは今年は



昨年比べて倍ぐらいの100匹ほど見ることができて、本当に嬉しかった」「昔、『野菜流しレース』という遊びを川でやっていたのですが、こんな遊びができるぐらいにキレイになってほしい」。故郷の川に対する子どもたちのストレートな思いに、大人たちも真剣な顔で聞き入ります。

子どもたちの成長を地域みんなで喜びあう

3年生の男女2人は、折々の農作業を見やすくまとめたはぎ新聞(カード4-4)を見せながら、全校で取り組んだ「もち米づくり」の発表を行いました。子どもたちからのお礼の言葉、「地域みなさん、ありがとうございます!」の声は、米づくりをサポートしてきた人たちにとって何より嬉しい贈り物です。6年生の女子4人組は、賀茂ナスづくりの発表。去年はあまり納得できる味にならなかった賀茂ナス。今年もう一度再チャレンジすることになったその経緯を、寸劇で表現するところから始まります。「今度は名人に習ってもっと良い賀茂ナスをつくらうや!」。

地域の人たちに見守られながら取り組んできた教育ファーム。その発表をすることで子どもたちの体験と学びが深まり、発表会に参加した地域のみんなのつながりも深まります。体験による子どもたちの成長ぶりをみんなが発見し喜び合い、こうして教育ファームは地域のなかでさらに深化しながら、次の年へと引き継がれていくのです。

いきいきフェスタや感謝祭 もう立派な地域・社会の一員だ

スローフードフェスタで「食」への思いを伝えたい



福岡県で久留米筑水高校の生徒と教育ファームに取り組む「はかた一番どり協議会」。お米と野菜栽培だけでなく、酪農、養鶏、馬の飼育まで取り組んできた高校生たちが、地元で開催される筑後スローフードフェスタに出店します。「体験でふれ合ったニワトリやウシやウマ、イネや野菜、普段は何気なく食べているけどすべて

に生命がある。そのいのちを無駄にはできない」という思いを胸に、オリジナルメニューづくりがスタート。「試作と試食の段階で、生徒たちから具体的なアイデアやサービスの提案が出たんです。商品売るの意味合い、育てた畜産物への思いが深まったんだなぁと感無量でした」と語るのは、指導農家の古賀宣彦さん。メニューは3品、養鶏体験をした鶏肉と酪農体験をしたチーズに野菜を添えた照り焼きチキンチーズバーガー、チェリーバーガー（馬肉＝桜肉＝チェリー）、はかた一番どりの骨抜き唐揚げに決定しました。さまざまな体験を経ていよいよスローフードフェスタに臨む頃には見違えるようになった男子生徒が、フェスタ当日、油まみれで調理に奮闘しながら、「この肉もあのかわいいひよこが大きくなって肉になったもの。大事に揚げて、みんなにおいしかった、食べて良かったと思ってほしい。きちんと食べてもらわなくちゃ……」。教育ファームで深く学んだ「食」への思いを振り返りました。



高校生たち大奮闘

感謝祭 気づいて感じて表現して

地域の親子たちと一緒に教育ファームに取り組んだ長野県安曇野市のバジルクラブ(カード2-4、4-9)。活動の締めくくりとなる感謝祭では、アイガモと一緒に育てたお米で餅をつき、そして燻製にしたアイガモをみんなでいただきます。

会場となった地元公民館の部屋の座布団にみんなが座ると、入ってきたのは袈裟姿のお坊さん。「心を静かにして、自分のことと他の人のことと、それからアイガモのことを思いましよう」。



お供えされたアイガモ

部屋の柱や窓には、親子たちが思いを綴った紙が貼られています。俳句や詩のコンクールようですが、別に賞を決めるためのものではありません。「アイガモは田んぼのなかの番人だ」「カモたちにいのち教わる子どもたち」……1枚1枚に、感じてきたことや学んできたこと、自分の子どもに、自分のお父さんやお母さんに、友だちや他の人たちに伝えたい言葉が書かれています。坐禅が終わり、活動のときには小さな子たちのお兄さん役になって活躍

した中学生が挨拶。「みんなで育てた野菜や餅やアイガモを感謝していただきましよう」。そして、みんなの詩をもとに生まれた鎮魂歌「ありがとうあいがも2009」を合唱。

「食」のつながり、生きものをつながり、地域の人たちとのつながり、それらすべてに感謝する、文字どおりの「感謝祭」になりました。

ありがとうあいがも2009

ありがとう 合鴨たち
実りをむかえた田んぼに
あなたの姿はないけれど
ねがっています
いつかどこかでまた会えることを
たとえ目には見えなくなっても
全ての命はかたちを変えて
ぼくらといっしょに 生きてゆく